令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価 各項	評価 総合	成果と課題
教務部	生徒に主体的な学びの習慣を身につけさせるために、各教科の授業や探究的な学びのあり方を検討する。	生徒に主体的な学びの姿勢を育成するための効果的な授業について協議し、教員間での情報共有や授業改善に向けて、学期に1回授業見学週間を設定する。	B	B	授業互見週間などを通して、ICT活用を活用した授業の見学や主体的な学びのあり方についての協議の機会を増やし、授業改善について考えることができた。また、地域探究における地元機関との連携や講演会を通して、生徒の興味関心を広げ、社会参画の動機付けとすることができた。次年度も今年度の実践をもとに協議を継続していく。
		総合的な探究の時間を通して、生徒が自らの興味関心や進路を考え、主体的・協働的な活動や社会参画の動機付けを実施する。	A		
	中高の連携を強化し、中高6年を見通した教育のあり方を検討する。	中高一貫教育の実践を振り返り、充実した教育活動をさらに発展させるために、中学校会議・中学校教科担当者会議との連携を月に1回行う。	A	A	分掌会議等を通して情報共有の機会を一定確保することができた。今後は中高一貫教育の6年の実践を振り返りながら、より充実した教育活動のあり方の協議を継続していく。
生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。	生徒会や各種実行委員会と連携して生徒が主体的に学校行事を企画・運営する能力を養い、学校行事における生徒の活動を充実させる。	A	A	文化祭・体育祭実行委員会を新たに設置し、実行委員と生徒会を中心に生徒主体の行事運営を行った。次年度はさらに生徒が関われるようにしたい。 生徒会活動では、かもまつりへの参加や南山城支援学校との交流などを行い、活発に活動できた。
		生徒主体の効率的かつ合理的な部局活動ができるよう顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。	B		
		生徒会活動の活性化を図る。	A		
	中高一貫校としての組織的な生徒指導を実践する。	生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制を構築して全教職員で一貫した指導を行う。	B	B	長期休業明けの生徒観察シートやいじめ調査を活用し、生徒の状況把握に努め、気になる生徒の情報を教員間で共有した。 服装についてあいまいな部分があり、全教職員で一致した指導ができていなかったため、次年度は統一した指導ができるように指針を示したい。 生徒指導事案に際しては、学年部と連携して対応した。
		個々に応じた効果的な指導を行うと共に、協働的活動を支援する環境を構築する。	B		
		生徒指導事案が発生した際は、関係教職員との連携を迅速に行うとともに情報共有を円滑に行う環境を構築する。	A		
	生徒・教職員の人権意識と実践の深化を図る。	教職員の人権意識の深化と具体的実践を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。	A	A	人権学習と教職員の人権教育研修会を実施することができた。南山城支援学校との交流など、生徒が人権を学ぶ機会を設けることができた。
		生徒の人権意識を高め、地域の企業・団体等との連携強化や国際交流を通し、生徒自ら課題の発見・解決に取り組む活動を実施・企画する。	B		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価		成果と課題
			各項	総合	
進路指導部	難関大学進学に向けた効果的な進学講習やスパートゼミを開講する。	進学講習の内容を教科・学年と検討・調整し、確かな学力の定着を目指した進学講座を編成・実践する。	A	A	2年生の冬期講習に理科を開講するなど教科・学年と連携し、生徒の実態にあわせた進学講座を実施した。 スパートゼミにおいて各開講講座のねらいをより明確にすることにより、生徒の学習計画の設定に寄与した。
		高3生対象のスパートゼミへの取り組みを通して、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成する。	A		
		各々の学年との連携を密にして効果的な進路学習計画を立案・実施し、担任の個別面談をサポートするなど、生徒の希望進路を実現するための進路指導の協働体制を強化する。	A		
	「生徒の学びたい」を刺激する。	魅力的な自習室を整備し、自主自学の学習環境・形態を学校としてサポートする。	A	A	高校3年生向けの自習室にブース型の机を、Qスクエアには照明器具を設置するなど学習環境の整備を行った。 Teams等で進路情報を積極的に発信を行ったが、生徒自身がより自らの進路に主体的に向き合っていけるような方法を工夫していく。
		Teams等で積極的に進路情報等を発信することにより、生徒が主体的に進路を選択・決定していく姿勢を支える。	A		
		進路委員を中心として、生徒が進路行事等に積極的に参画する体制を整備し、生徒と共に本校の進路指導を創る。	B		
	各模擬試験データの分析をし、指導に活用する。	学級担任・教科担当者が自らFINEシステムやデジタルサービスを活用して学習指導に活かせるように、教員集団としての情報分析力を高める。	A	A	模擬試験の校内分析に関して教科担当者、学年部と協働して学校としての指導方法の共有・蓄積を図った。
		各模擬試験データを各々の学年と進路指導部の協働体制で分析し、情報を教員間で共有することにより、見通しをもった指導を行う。	A		
保健部	「自分の健康は自分でつくり、守っていく」という意識を育む。	保健委員会発行”Well-being”を通じて生徒目線のメッセージを発信するとともに、保健室だよりを活用して情報を提供し、感染症や予防対策について生徒に正しく理解させる。	A	A	”Well-being”の発行を学期1回にしたが、担当委員が工夫して作成した。 欠席連絡フォーム、担任への聞き取り、健康調査などを通じて、生徒の健康状況を把握し、適切な対応に繋げることが出来た。
		感染症予防についての対策を状況に応じて継続し、健康観察、体調不良者への対応等に全校体制で取り組むことができるよう教職員間での情報共有を密にする。	B		
	特別な教育的支援を必要とする生徒に、組織的・継続的に対応する。	学年部・教科担当者等と連絡を密にして生徒情報を共有し、学校適応指導会議とも連携を図りながら個々の生徒の支援にあたる。	A	B	保健室への生徒来室状況をデータ入力することにより、全教職員が状況をタイムリーに把握できるようにした。 今後も学年部・教科担当者との情報共有、関係機関とのさらなる連携を心がけ、組織的に生徒を支援していく。
		必要に応じて外部の関係機関との連携を行い、生徒の実情の把握、理解に努めるとともに、個々に応じた支援を充実させる。	B		
	「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を育む。	清掃用具の整理などの年間を通した美化委員会の活動を通じて、全体の美化意識を向上させる。	A	A	日々の積極的な清掃活動に向けての備品整備等を推進し、校内美化に取り組むことが出来た。 月例清掃や特別清掃時の清掃活動を、より充実したものにしていきたい。
		日々の清掃を丁寧に行えるよう、清掃備品の整備を継続し、清掃指導の充実にさらに力を入れる。	A		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重点目標	具体的方策	評価 各項	評価 総合	成果と課題
図書部	図書委員の活動がより充実したものになるように活動内容を見直す。	図書館に対するニーズを探り、魅力ある図書館づくりをする。また、図書委員会だより「F.I.B」を隔月ごとに発行したり、読書月間に「フィブレット」を作成したりすることにより、読書啓発を行う。	A	A	図書委員会だより「F.I.B」の発行や「フィブレット」作成を通して、生徒とともに図書館や本の魅力を発信することができた。
	授業での図書館利用と、教科内容に関する書籍の生徒への貸し出しを増加させる。	授業でより有効な図書館利用ができるように、教科との情報交換を密にする。また、教科で作成した作品展示を通して、図書館に足を運ぶ生徒を増やす。	B	B	多くの新着図書を準備し、すぐに利用できるように努めた。読書月間を中心に、生徒たちが図書館に足を運ぶきっかけ作りができた。教科での利用も多く、連携して読書活動を促進できた。一方、近年来館者が減ってきている。効果的な取り組みを模索するとともに、図書館の新しい在り方や意義を検討していく必要がある。
		教科と連携をし、教科内容に関わる書籍を読ませる仕掛けづくりを工夫する。	B		
	読書活動を啓発し、生徒の目を広く社会に向けさせることにつなげる。	新聞や時事問題といった受験時の小論文、英作文に後々関わってくる書籍を読ませるような仕掛けづくりを工夫する。	B	A	新聞などを日々閲覧できるようにし、小論文などに必要な書籍なども多く準備できた。書籍のコーナーを定期的にリニューアルしたり、図書だよりを発行することで、タイムリーな情報発信ができた。団体鑑賞やビブリオバトルなども読書活動推進のきっかけになった。
		「1box」コーナーなどを活用し、多様なテーマの展示を行う。また、読書活動啓発のために、デジタルサイネージ等のICT機器を活用し、図書に関する情報の効果的な発信方法を模索する。	A		
		団体鑑賞などの学校行事に関連した本の展示や校内ビブリオ大会をきっかけに、普段読書をしない生徒にも読書を促す機会を増やす。	A		
企画研究部	各種課外活動を充実させ、生徒の主体性を育成する	留学フェアや各種説明会など留学・国際交流活動に関する広報を充実させることにより、生徒が主体的に海外交流に参加できる土台を作る。	A	A	台湾やオーストラリアからの来校者との交流や留学などを通して生徒が主体的に海外交流を行う土台を作ることができた。サイエンスリサーチ科の研究発表を学校説明会内で実施するなど、広報活動で積極的に生徒が活動、発表する場所を提供できた。
		コンクールやボランティア活動などの課外活動に加え、オープンキャンパス等学内広報活動において生徒主催企画を積極的に導入するなど、学校内外において生徒が主体的に活動できる場所を提供する。	A		
	情報発信においてICTの利活用を図る	ホームページやSNS等を利活用し、動画などのツールを利用した情報発信を適宜企画・実施する。	B	B	学校説明会においてプレゼンテーションや動画等を活用できた。またさくら連絡網の活用により、保護者への連絡がスムーズに行えた。保護者や入学希望者への情報提供をより円滑にするためにホームページやSNSを効果的に活用することが必要である。
		SNS等を利活用した広報活動の効果やプレゼンテーションについての研究・協議を適宜実施する。	B		
事務部	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう各部と調整しながら事務を進める。	B	B	学校運営に関する各部との調整及び柔軟な施設管理とも、必要に応じて行うことができた。 より効果的、計画的な実施を今後の課題としたい。
	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手すると共に、柔軟に施設管理の改善をする。	A		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価		成果と課題
			各項	総合	
第1学年部	視野を広く持って挑戦する心を育む。	南陽祭等、学校行事において、生徒自身で決定、実行する機会を多く作る。	A	A	南陽祭、研修旅行、学年行事をはじめとして、生徒自らが決定し、主体性をもって実行する機会を、ほとんどの学校行事において作ることができた。
		部活動やコンテスト、留学など、自主的な活動の場を広げられるよう、関係分掌と連携し、工夫して情報提供を行う。	A		
	自立した学習のための生活習慣の確立を支援する。	教科担当者と連携し、授業、定期考査を中心とした、基本的な学習習慣を確立するよう指導する。	B	B	定期考査ごとに学習方法を振り返り、改善していけるような取り組みを行った。また、模擬試験受験後の学習指導についても、進路指導部と連携し、効果的に実施できた。今後、各教科担当者とより密に連携を図っていく必要がある。
		スケジュール管理について、ICTを効果的に用いる具体的な方法を紹介する。	B		
	人権感覚を涵養し、多様な価値観を認めあう、すべての生徒にとって居心地の良い環境を形成する。	挨拶を励行し、あたたかな雰囲気を作る。	B	A	明るく活気ある雰囲気を作り出すことができた。今後は、規範意識のさらなる涵養と、コミュニケーション能力を一層高める施策を実施していきたい。また、人権学習を学校教育全体で行い、人権意識・感覚を育てていきたい。
		生徒指導部と連携し、人権学習を適宜実施する。	A		
		教室や施設をきれいに使用し、協力して良好な学習環境を作り出すよう意識づけを行う。	A		
第2学年部	高校生としての自立した生活習慣を確立させる。	挨拶を励行させ、清掃活動の徹底を行う。	B	A	・自ら進んで挨拶ができない生徒が一定数存在し、その割合に変化がなかった。 ・人権学習をはじめとした様々な機会をとおして、他者を思いやる姿勢を身に付けさせることができた。
		多様な集団の中で、他者との違いを認め他者を思いやる姿勢を身に着けさせる。	A		
	高い目標を持ち、目標に向かって主体的に粘り強く学習する姿勢を身につけさせる。	高い進路目標を持たせ、目標に向かって挑戦する姿勢を身に着けさせる。	A	A	・定期的に学年集会を開き、複数の教員から話をすることで目標を持って学習する姿勢を身に付けさせた。 ・受験科目により、授業の科目を取捨選択しようとする姿勢が一部の生徒に見られる。
		主体的に学習する姿勢を身に着けさせる。	B		
	校内行事や校外活動に主体的に参加させ、創造性や人間性の成長を促す。	研修旅行・文化祭・体育祭・学年行事等に主体的に取り組ませ、人間的成長を促す。	A	B	・行事に対して積極的に取り組ませることができた。 ・ICTの使い方については引き続き指導が必要な生徒も一定数存在している。
		ICTの活用を促し、より創造的な活動ができる素養を身に着けさせる。	B		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価		成果と課題
			各項	総合	
第3学年部	「挑戦する文化」を醸成するための学年集団を形成していく。	強い心を育めるように、学年集団に対して支え合うことの重要性を示していくための取組を行う。	A	A	学習活動のみならず，学校行事や日常の取り組みに対し，積極的な姿勢が見られ，挑戦する力の礎を築くことができた。
		学習活動のみならず、高校時代にしかできないことに全力で取り組ませる。	A		
		進路指導を単なる卒業後の行き先としてでなく、生き方の指導としての共通認識を持って指導する。	A		
	「自立した学習者の育成」について、生徒・保護者・地域へ発信していく。	生徒のアイデアを活用し、可能な啓発活動を行うことで、各自習室の稼働率を高める。	A	A	希望進路の実現に向け，よく努力していた。 自習室の稼働率が上がり，学習環境を整備することができた。 保護者への発信は余りできなかった。
		現状の学力で判断するのではなく、個々の生徒の目標に向け、より具体的な学習活動のあり方を示す。	A		
		高い目標を達成していくために、学年と各教科に取組の「見える化」を求める。	B		
	難関大学合格に向けた取組を生徒及び教職員で育む。	授業レベルの向上、集団としての目的意識の高揚を図り、最難関大学の入試に適応しうる学力をつける。	B	B	多くの生徒が個々に掲げた目標に向け，諦めずに取り組むことができた。 講習やｽﾊﾟｰﾄｾﾞﾐを充実させることができた。 苦手教科の克服等に課題が残った。
		最後まで諦めずに取り組む姿勢を育み、最難関大学15名以上、難関大学40名以上の受験者を出す。	A		
		教科科目の枠を超えた中長期的学習指導のあり方について具体的方策を提言できるよう研究する。	B		
サイエンス リサーチ科	コロナ禍を経た探究活動の変化分析とさらなる進化に向けた今後の在り方を模索する。	校外（大学や企業など）との連携を再強化し、主体的な学習意欲の醸成につなげる。	A	A	・従来の取り組みに加えて、今年度は大学との連携授業を新たに増やすことができた。 ・校内での口頭・ポスター発表会をコロナ禍前のスタイルに戻すなど、活発な質疑応答の場を多く設けることができた。 ・連携先とのつながりを大切にし、探究活動の質的向上を目指していく。
		課題研究を通じた生徒交流を活性化する。具体的には、学年の枠を超えた研究交流の場を設定するとともに、校内での研究発表会の運営等を生徒主体で行わせる。	A		
	ICTの利活用と探究活動の充実化を図る。	「探究活動の基礎」、「探究活動ウオーミングアップ」などの取組を通じて、探究活動におけるICTの活用方法の基盤を構築する。	B	A	・ロイロノートやFormsを活用することによって、研究発表の振り返りや評価を効率的に共有することができた。 ・日々の探究活動を行うにあたっては、生徒各自が持つiPadと校内のPCを併用し、ICT活用の幅をさらに広げていく必要がある。
		校内外での取組をホームページ等で積極的に発信し、本学科の魅力発信に努める。	A		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価		成果と課題
			各項	総合	
附属中学校	特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。	自立した学習者の育成を目指し、ICTを活用しながら生徒の主体的な学びにつながる授業研究、授業実践を行う。	B	B	学年が上がるごとに、生徒のICT活用方法も多岐にわたり、学習内容を深めることにつながっている。また、教員も積極的にICTを活用した授業実践に努めている。それらの実践事例を共有することで、教育効果をさらに高められる可能性がある。
	校内や校外の人材との交流を通して、人間的な成長を促す。	学習活動や学校行事に主体的に取り組ませる中で、仲間意識や人格の成長を図る。	A	A	南陽祭では、企画から運営まで生徒主体的に取り組むことができた。また、生徒会本部役員をはじめとし、生徒会活動にも積極的に取り組んでおり、自分たちの学校生活を自分達でよくしようという雰囲気が醸成されつつある。一方、校外の人材やコンテストとの接続、およびそれに挑戦する風土の醸成には課題が残る。
		部活動やボランティア活動への参加を促し、各種検定やコンテスト等に挑戦する風土を醸成し、活動領域を広げ人間的な成長を図る。	B		
	より高い目標を掲げ、主体的に学習する姿勢を身に着けさせる。	中高一貫校としての教育実践を踏まえ、生徒が相互に好影響を及ぼしながら、それぞれが「自ら学ぶ」集団を作り、確かな学力を身につけさせる。	A	A	学びのアトリエのシステムが整理され、横だけでなく縦のつながりから学習の刺激を受け、相互に影響を与えながら主体的に学ぶ雰囲気が出来てきた。高校での学習の仕方やテストへの取組方を参考にしている生徒もいる。その影響をより広い範囲の生徒に拡充する仕掛け作りの必要がある。
国語科	生徒が自ら学ぶ姿勢が持てるよう、段階に応じた指導方法を研究し、改善を図る。	ICT機器やデジタル教材のより効果的な活用方法を研究し、実践する。	B	B	ロイロノートの活用により、生徒の学習に役立てることができた。ICTを生徒の主体的な学びにつなげるために、引き続き実践を積み重ね、研究する必要がある。
		段階に応じた課題の出し方や小テストのあり方を検討し、生徒が主体的に学ぶことができるようにはたらきかける。	B		
	質の高い授業やスパートゼミにより、希望進路の実現及び社会生活に対応できる国語力を育成する。	生徒に学習習慣を確立させ、基礎知識・語彙を定着させるとともに、言語活動を通して思考力・判断力・表現力を向上させる。	A	A	言語活動を単元ごとに実施し、生徒の国語力向上につなげた。大学の入試問題を研究し、スパートゼミでの指導に活かした。ビブリオバトルを通して読書のおもしろさを啓発することができた。
		難関大学の入試問題を研究し、生徒の進路実現につなげる。教科内で指導の成果を共有する。	B		
		生徒の知的好奇心を高める授業を展開するとともに、生徒に読書のおもしろさを啓発し、生徒の視野を広げる。	A		
	中高一貫を見通した指導体制の更なる充実・発展を図る。	生徒を多面的に評価するために、評価方法や評価材料を検討・改善し、効果的な指導につなげる。	B	B	言語活動や課題、テスト等により多面的評価を試みた。評価方法は概ね改善できているが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準についてはさらなる研究が必要である。
		教科内外で情報共有を密に行うとともに、中高を問わず、相互に授業見学を行う。	B		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価 各項	評価 総合	成果と課題
地歴・公民科	主体的・対話的で深い学びにより、確かな学力を育む。	主体的・対話的で深い学びについて、小教科で実践し、教科会議にて共有する。	B	A	小教科内での密な連携により、新課程で統一した授業実践を進めた。主体的・対話的であっても、それを深い学びにつなげることはこれからも課題である。
		新学習指導要領での教科指導について、実施内容・評価方法を教科内で検討し、より効果的な学習につなげる。	A		
		ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を検討・共有する機会を設ける。	A		
	中高一貫を見通した指導を行い、附属中学校から高校への円滑な接続を果たす。	新学習指導要領実施も踏まえつつ、中高一貫教育の6年間の指導方針について検討する。	B	B	全学年がそろい、大学入試や新課程も踏まえて、中学校と高校での学びについて、指導内容の整理を進めていく。
		附属中学校でこれまで実施してきた指導をふりかえり、指導内容の整理・再検討を行う。	B		
	新学習指導要領を踏まえ、大学入学共通テストなど入試を見据えた授業を行う。	入試の傾向を各科目担当者で分析し、指導内容を検討・共有する機会を設ける。	A	A	スパートゼミや3年夏期・冬期講習を活用し入試対応をしていった。教科会議で今年度の成果・取り組みの振り返りと、今後の課題とについて共有する機会も設けた。
		スパートゼミ、進学講習などを効果的に活用し、生徒の希望進路実現に向けた取組を教科内で検討していく。	B		
数学科	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせる指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような質の高い授業を展開する。	A	A	生徒の学力・希望進路が多様化する中で，授業展開を工夫することはもちろん，授業外での個別指導などを行うことで，基礎的な数学力の定着を実現することができた。 また，ほぼ全ての教員が必要な場面でICTを活用することができている。一方でその実践を共有する機会が少ないことが課題である。
		希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。	A		
		BYODや中学での授業の実践を教科内で共有し、個々の教員がICTをより一層効果的に使えるようにすることで、生徒の学力伸長に繋げる。	B		
	数学を楽しみ、主体的に探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や指導方法を教員間で共有し、実践する。	A	A	同じ学年を担当する教員間では密に連携をとり，指導方法などを共有し実践することができた。一方，学年を越えた全体での共有をする機会が少なかったことが課題である。 ７月に数学検定を希望者対象で実施し，24名の参加があった。様々なコンテストなどを紹介はしているものの，生徒が多忙化していることもあり参加者は少ない。
		数学検定やその他コンテストへの積極的な参加を呼びかけ、数学の魅力・面白さに触れたり、普段とは異なる数学の問題へ挑戦したりする機会を増やす。	A		
		数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。	B		
	中高一貫教育および難関大学進学に向けた指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。	6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、適宜教科会議で共有し、進捗状況を確認する。	B	B	「自律した学習者」の育成のために，個々の教員は工夫し実践している。一方，それが中々共有できておらず，６年間を見通した系統的なものになっていないことが課題である。 スパートゼミや講習については，担当者が密に連携をとり内容や進め方を考えることで，より効果的なものにすることができた。
		スパートゼミ・夏期講習・冬期講習の内容や進捗状況について、教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた指導方法を確立する。	A		
		「自律した学習者」の育成に向けた授業のあり方、課題設定のあり方について、6年間を見通した段階的指導を考え、実行する。	B		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価		成果と課題
			各項	総合	
理科	主体的に学ぶ生徒を育成する。	ICTを活用した主体的・対話的な授業を行い、思考力・判断力・表現力の育成を行う。	A	B	iPad等のICTを活用することで、授業進度が安定化し、生徒主体の調べ学習や発表の機会、個別指導や発展的内容に取り組める時間を設けることができた。 一方で、主体的に学ぶことができていない生徒に対する個に応じた指導が十分行き届いていなかった。今後、個々の学力や課題を組織的に共有し、指導にあたる必要がある。
		個に応じた指導を目指し、効果的な授業のあり方、課題のあり方について模索する。	B		
		模擬試験の結果等を通して、生徒の個々の学力や課題を共有するなど学力伸長に向けた組織的な指導方法を工夫して、難関大学進学など自ら高い目標をもって挑戦する心を育てる。	B		
	授業を起点とした探究活動の深化を図る。	実験を充実させることにより、理科への興味を深めるとともに、生徒の挑戦心、自主性を育て、探究活動等において外部発表での受賞を目指すことができる生徒を育成する。	A	A	探究活動では、生徒主体で研究を組み立て実践していくことができた。科学の甲子園Jr.全国出場等外部での活躍も見られた。 各科目内の授業内での実験は回数を増やす等より一層充実させる必要があり、そのためにはエアコン等の設備の充実は欠かせない。
		中高一貫6年間の教育を総括し、授業や実験の方法を見直し、その成果を他クラスの授業だけでなく、サイエンス・総合的な探究の時間においても活用する。	B		
保健体育科	生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育てる。	挑戦する姿勢や主体的に取り組む力を育むとともに、公正・協力・責任・参画に対する意識を高める指導を行う。	B	A	・運動の実践を通じて、課題に挑戦する姿勢や主体的に取り組む力を育むための指導を行った。 ・集団で運動に取り組む中で、運動の技能だけでなく思考力やコミュニケーション能力等の育成に繋げることができた。 ・新体力テストの結果を踏まえ、補強運動を取り入れるなど、コロナ禍に伴う体力の減少を補うための体力づくりを計画的に実施した。 ・自己や集団の課題に向き合い、生徒がより主体的に計画・実践に取り組む機会を作れるよう指導の工夫に努めたい。
		課題の合理的・計画的な解決に向けた学習過程を通じて、思考力・判断力・表現力を育成する。	A		
		生徒の実情に応じた選択制授業を実施し、運動の楽しさや喜びを深く味わえるようにする。	A		
	現代における健康課題について知識、理解を深める。	現代における健康課題について正しい知識を身につけ、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していくための資質・能力を育成する。	A	A	・単に知識を得るだけでなく、現代の健康課題について自己の意見を持ち、より深い視点で考えることができるよう指導を行った。 ・幅広いテーマで課題学習を行い、ICTを活用しながら主体的に探究・発表する姿勢が見られた。学習内容と発表の質を高め、より価値のある実践になるように努めたい。
		課題学習の研究の質を高め、現代における健康課題をより深く探求する視点を育む。	A		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重点目標	具体的方策	評価 各項	評価 総合	成果と課題
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方（思考力・判断力・表現力）を学び、芸術を愛好する心情を育てる。	中学校との関連をふまえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。	A	B	芸術活動を通して互いを認め合う力を醸成できた。
		鑑賞や制作・発表を行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。	B		
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む。	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感受させ、自ら表現することができる力を養う。	A	A	発表や批評活動によって日本の伝統的な芸術を味わうことができた。
		グループ発表・学習をおこない、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。	A		
	生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む。	教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。	A	A	ICTやタブレットを効果的に用いることができた。 鑑賞、創作領域での新たな教材を研究することができた。 今後も積極的にICTを取り入れた授業を展開できるよう努める。
		学習者の知的好奇心を喚起させるような授業が展開できるよう努める。	B		
		多様な芸術について理解を深めさせるため、視聴覚教具を用いて鑑賞教材を研究し、教科指導力の向上に努める。	A		
英語科	基礎学力の定着を図る。 自立した学習者を育成する。	各学年の目標を達成するための学習方法を、具体的に指導する。	A	A	4技能5領域の教授法や評価方法について等の外部研修を通じて研究を深め、実践した。学習方法やその成果を振り返る機会を持たせ、主体的に学習に取り組める姿勢を養った。 オンライン教材や教育用アプリについては、常に新しいものが開発されるため、来年度も引き続き研究を進め、生徒の実情に合ったものを採用できるようにする。
		指導要領に即したCAN-DOリストに沿って、4技能5領域（聞くこと・読むこと・話すこと（やりとり・発表）・書くこと）の活動を生徒の実情に合わせて授業に取り入れ、到達度や目標を把握するよう指導する。	A		
		教科書準拠のオンライン教材や教育用アプリについて研究・実践を進める。	B		
	英語でコミュニケーションを図りたいという態度を育成する。	英語に関する知識を統合し、目的・場面・状況に応じて活用する力を身につけさせる。	A	A	中学では授業内外において、多くの生の英語に触れる機会を提供した。フィードバックを行い、PDCAサイクルができるよう工夫し、個々が主体的に次の目標を立てる姿勢を養った。 高校は各学年のレベルに応じ、1対1の口頭試験や、スピーチライティング・自由英作文などを通じて、自分の考えを論理的に英語でまとめる力を育成した。 生の英語に触れる機会を限られた時間の中で、効果的に実施する方法を検討する。
		各学年のレベルに応じ、自分の意見を理由や例などを挙げながら英語で書く力を養成するとともに、他者の意見を尊重する風土を醸成する。	A		
		分掌やAETとの連携を密にし、生徒の英語学習への内発的な動機を促すため、生の英語に触れる機会を充実させる。	B		

令和5年度　京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域 （分掌・教科領域）	重　点　目　標	具　体　的　方　策	評価 各項	評価 総合	成果と課題
家庭科	生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践させる。	B	A	新教育課程の実施初年度として、「18歳成人」、「金融教育」に重点を置いた授業づくりを意識し、自立に向けて、興味関心を持つ「きっかけ」となる授業づくりに努めた。また、多感な思春期、昨今の社会情勢を配慮し、「心に響く」、「役に立つ」授業に努めた。 コロナ禍で制限されていた調理実習については、安全面や健康面に配慮しながら再開した。また、ペアワーク、グループワークを適切に取り入れ、人とかかわりや他者理解の機会を大切にした。 環境に関する取り組みは、生徒発信型で家庭において継続することができた。
		生活に根付かせる取組として、家庭との協力による復習の機会や年間を通した継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。	A		
		成人年齢の引き下げ、金融経済を意識した授業内容の充実に努める。	A		
	中高一貫教育の円滑な実施と、6年間を見通した指導を行う。 ICTの効果的な利活用を行う。	附属中学校一期生の学習の成果と課題をもとに、高校に繋げる家庭科教育の在り方を研究する。	A	A	中学校での学びを基礎として、高校に繋がる学びを意識した授業の組み立てを行った。 ICTの利活用については、調理実習の課題提出や作品提出の一部としての利用、栄養計算や図案検索など効果的な利用に努めた。 次年度も、研修会などの機会を大切にするとともに、社会情勢や生徒の家庭環境に配慮した授業づりに努めていきたい。
		ICTの利活用について、効果的な学習指導のための研究を継続し実践を行う。	B		
		研究授業や研修会等を大切にし、授業改善に努める。	A		
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を身に修得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。	B	B	調べ学習では、Web情報に頼りすぎずに友人と情報を共有しながら自分の考えを発表またはまとめて提出する課題を月に1回程度行った。また、プレゼンテーションの上達を意識した発表課題を実施することで、相手に正しく伝えることの難しさを体感する機会とした。 次年度は、発表課題の作成方法に幅を持たせ、プレゼンテーションソフト以外のICTスキルを取り入れた作品づくりに取り組みたい。
		実技課題ではPDCAサイクルを意識しつつ、日常生活を題材としたものを設定する。制作後はiPad等を活用した意見交流を通してコミュニケーション能力を養うとともに、総合的な探究の時間や、将来のプレゼン制作につなげることができるICTスキルを育む。	B		
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	インターネット、SNS、電子メールやスマートフォンやタブレットなどの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させるとともに、Microsoftアカウントを含む校内で利用するユーザID等の気密性の高い情報の管理力を養う。	A	B	校内で利用するIDをMicrosoftアカウントのユーザ名と一致させることでユーザIDに触れる機会を増やし、メモ等に頼らずにユーザIDを記憶して使用するように指導した。また、毎年年末に公表されるワーストパスワードの共有を行い、機密性への意識を育んだ。 次年度は引用や著作権、肖像権への配慮についてより身近な題材を検討し、人権教育への意識をさらに高めた授業づくりに努めたい。
		知的財産権に代表される、日常生活における身近な法規を理解し、著作権の保護、肖像権への配慮に努め、情報社会の一員として社会に参画する態度を養う。	B		
	主体的に学ぶ生徒を育成する。	コンピュータ操作の際に苦手意識を持ちがちなタイピング能力を伸ばし、苦手意識を持つ生徒がより前向きに課題に取り組めるように目標設定と評価を行う。	A	A	10分間で入力できる文字数が年度当初と比較して平均150文字多く入力できるようになった。入力数の平均は450文字となり、一般的なコンピュータ業務で必要とされる500文字に近づけることができた。 また、自由に入力できる文字数が増加したことで、プログラミング学習でも例題を参考に短時間で自作プログラムの作成に積極的に取り組むことができ、次年度の総合的な探究の時間におけるAI開発への挑戦に向けたきっかけ作りができた。
		Pythonを利用してアルゴリズムを考え、プログラミングを行う過程において、制作したプログラムコードを共有しながら、それらを評価し改善していく力を育む。	A		

学校運営協議会による評価	○「挑戦・変化・主体性」という新たな目標に向けてしっかりと進めることができていると感じる。主体性については、自分で考えて動くことで新たな知識が身につくと同時に、どのようにその力をつけさせるかという教育の力量が問われている。 ○教育課程の内容もそうであるが、学校が非常に多くの事に取り組んでいることに驚いている。教職員の負担が増えることが心配である。 ○体育祭・文化祭を今年度から生徒による運営としたが生徒が生き生きとして見ていて楽しいものであった。 ○「学びのアトリエ」という学びなおしの時間は、教育課程外の取組ではあるが南陽高校附属中学校独自の取組であり非常に効果的なものであると感じる。
次年度に向けた改善の	○主体的・探究的な取組を通して「挑戦する文化」の醸成を進めていく。今年度から学校行事については生徒主体の実行委員会を立ち上げて取り組んできたが、今年度の取組を振り返り「学校を動かす」活動として更に進化したものとなるよう活動機会を増やす。また、普通科・サイエンスリサーチ科ともに総合的な探究の時間を更に充実させ新たな領域への興味・関心を高めさせるよう内容を充実させる。 ○難関大学合格に向けた質の高い授業を、ICT機器の更なる有効活用により発展させるとともに、放課後講習「スパートゼミ」の内容・実施形態を生徒の自学自習を支えるものとなるよう検討していく。 ○留学やSTEMプログラムへの積極的な参加を呼びかけることで、グローバルな視野をもち国際性を身につけさせる機会を増やす。